

# 思い過ぎ

井口昭久

昨年9月の夜、NHKテレビで市川染五郎に密着の特別番組があった。ラスベガスの屋外で噴水とCGを駆使した歌舞伎を演じていた。私は最初から最後まで見ていた。染五郎が殺陣を演じ水の上を走った。CGの鯉と激闘を演じて最後に鯉を頭上に掲げ、右あしを踏ん張って大見得を切った。私はそれを真似た。大腿を開いて右足を床にたたきつけた。その瞬間に全身の力が抜け、床に崩れ落ちた。右膝に激痛が走り、立つことができなくなった。妻の助けを借りてよろよろと立ち上がったが、右足を床につけても全身を支えることはできなかった。右足を骨折したようだった。

私は6年前にスパーでお皿を割って入院し、手術をしたことがある。その噂を聞いた人は「何故スパーでお皿を割って入院したのか？」と疑問に思ったそうだが、真相は、「スパーの駐車場を歩いているときに左足の荷物で左足を塞ぎ、右足の膝がコンクリートに激突して膝蓋骨を骨折、手術をした」ということであつた。

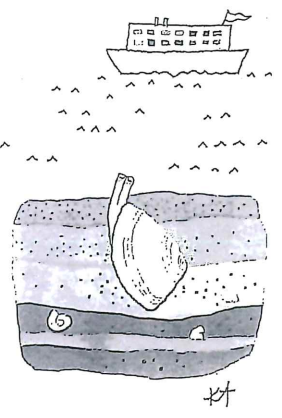
同じ事が身の上に起こったことに衝撃を受けた。前回はまだ比較的若かつた。しかし今回は根治はできないかもしれない。翌日入院することにしたが、翌日の入院までの間、前回使用したギプスを当てて予後を予測した。

人は誰でも最悪の事態を想像するものだ。私の脳内は不安の神経伝達物質が溢れ出て止まらなくなった。

しばらくは病院に入院しているが、近頃のご時世では病院に長くおいて貰うわけにはいかないだろうと思つた。そのうち退院することになるが歩けない私は家で終日過ごさなければならぬだろう。私はトイレに行くにもお風呂に入るにも他人に依存しなければならなくなるだろうと想像した。

家に帰ってからの、在宅療養の状態をどうするか。この地域での主治医は誰がいいか。訪問看護の手配はどうすればいいのだろうか。私の将来は極限まで煮詰まっていた。

しかしそれらは私の思い過ぎであつた。数カ月後には歩けるようになって退院した。日常生活は自分でできるようになった。杖を頼りに、大学へ行くこともできるようになった。しかし大学構内を腰を曲げて杖を頼りに歩く姿を見れば、私は老人に見えるであろう。



とまた被害妄想が湧いてきた。私を見た人が「井口先生は急速に老化が進んで杖を頼りに歩かなければならなくなった」と思うであろうと想像した。

私はその誤解を解くために会う人毎に「一口カではありません。骨折です」と言つて弁解をした。しかし多くの人は「廊下でないとこで骨折したと訳の分からんことをセンセイは口走るようになった」と思つたそうだ。それから3カ月がたち、今では杖も要らなくなった。

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)